

流れを読む

「ボーダーレス」でどこへいく

荘銀総合研究所理事長 牧口 徳幸

「ボーダーレス」という言葉が人口に膾炙（かいしや）し、軽く使われている。しかしその意味するところはぞつとする程大きく深い。百年以上前の十九世紀中葉に成立した「国民国家」の存在が問われているのだ。国民国家は第二次産業革命によって成立した「工業化社会」に対応すべく、各国がその生存を懸けて死に物狂いで作り上げて来たものだ。そのために人類は二度にわたって世界戦争を起こし、共産主義国家という壮大な実験と失敗を行い、それこそ二十世紀を「狂った世紀」にしてしまった。国民経済から世界経済へと舞台を移しつつあるのが「ポスト工業化社会」であり、情報化社会である。それはまさに「断絶の時代」である。そう考えなければとても理解出来ないような現象が次々と起こっている。例えばアメリカである。史上最長の好況が続き、財政赤字も克服された。しかし基軸通貨国にもかかわらず対外赤字はますます大きくなり、ついに一兆五千億ドルというとてもない対外債務を抱え込んでしまった。それでもアメリカへの資金流入は経常赤字を上回って続いている。対照的に日本は九十年代はほぼゼロ成長となって二十世紀を終わるうとしていた。目をヨーロッパ

に転ずれば、想像さえ出来なかった事が起こっている。国家は剣と通貨によって成り立つといわれた「通貨」を手離して「ユーロ」を誕生させた。また国境を越えた大型合併がぞくぞくと起こっている。タイムラー・クライスラーはどここの国の企業だろうか。ドイツ銀行のバンガーズ・トラスト、フォードのボルボ買収をどう理解すべきなのか。

更めて七十年代のレーガン、サッチャー革命の歴史的意義を考えてみたい。第二次大戦後、資本主義国家は共産主義に対抗してケインズ的な完全雇用政策を掲げ、福祉国家を作り高い成長を達成した。所得の平等化も進め、層の厚い中産階級を作り出して社会の安定と経済の繁栄を実現した。しかし、七十年代に入りアメリカ中心の戦後システムは方向転換を余儀なくされた。イギリスは「英国病」と揶揄（やゆ）され、アメリカは主力産業の自動車さえ日本やドイツに敗れ、デトロイトはゴーストタウンとなったとさえ言われた。そこで模索されたのが供給サイドからの大変革であった。市場競争原理の導入で民間部門の経済効率化を徹底して進める事と、小さな政府で財政支出の大胆な削減に取り組んだ。痛みを伴う体質改善的改革だつ

た訳で、二十年後の九十年代に入りその効果が開花した。日本も当時同様の問題に直面し国鉄の民営化等に着手したが、その後バブルに溺れ問題解決を先送りし傷口を広げてしまった。

大変化に適応して行くためには捨てるべきものを大胆に捨て、新しいものを大きく育てていかなければならない。グローバル化と市場競争から逃げては繁栄出来ない時代に入ってしまった。不適応を起こしている大国は日本、ドイツ、中国である。中国を別にすれば日本とドイツは経済競争に勝利して来たと言われた国である。ドイツは労資協調的、共同体的色彩の強い経済で成功して来た。今や、それがコスト高となって主要企業は国外に逃れ、国内は二桁（けた）の失業率に悩まされている。日本も数々の既得権を捨て切れず、大胆な改革を怠った付けが不況の長期化であり、いろんな社会的混乱である。景気対策は改革の痛みを和らげるために心急的に行うものであり、それによって改革の焦点がぼけてしまったては本末転倒である。ボーダーレスだからこそ、十年、二十年先を指した国家目標を掲げ、着実に実現してゆく力強さがなければ、希望に満ちた「二十一世紀の日本」は開けて来ない。